

# 多布施川流域ガイド

～人と生き物がつくる佐賀の宝の川～



2019.4.1 蜷川橋下流 撮影

## 嘉瀬川河道の変遷と多布施川

### 嘉瀬川河道の変遷図



注) この鳥瞰図は、嘉瀬川河道の西への移動をわかりやすく説明するため、下記出典資料に記載してある内容から、嘉瀬川の旧河道(平常時に流れる本流)をイメージ的に記入したものです。当時は、ここに掲載している本流のほか、洪水時や水量が多いときに流れる幾筋もの分流が存在し、分流の一部は、平常時にも利用されていたと想定されます。現在の海岸線で作成した鳥瞰図のため、当時有明海であったところは、濠筋だったと想定されます。

- 嘉瀬川(旧佐賀川)旧河道が筑後川によって西へ徐々に移動
- 縄文 今から八千年前の東名縄文遺跡(巨勢川調整池に埋戻して現状保存)は、有明海の入りに面した嘉瀬川の河口にあつたと想定されます。
- 時代 【奈良時代の本流】(肥前国庁→諸富大津→有明海への重要な水路交通路) 肥前国庁跡は、川上扇状地の陸路と水路交通網の要衝に位置する。市の川→巨勢川→佐賀江川→筑後川に合流し有明海に注ぐ
- ① 【平安・鎌倉時代の本流】 本流はさらに西に移動して、八田江湖(八田江)の線まで移る。【多布施川】
- ② 律令時代は、流域の条里地域を潤していた。戦国時代は、嘉瀬川の分流(平安・鎌倉時代は本流)として、石井樋の前身の北村井樋から取水。
- ③ 【戦国時代の本流】 本流は、さらに西に移動して、本庄江の西の方に移る。
- ④ 【現在の本流】 現在 近世初頭に現在の河道に収まり、成富兵庫茂安が石井樋と筑後川に千栗土居(堤防)を築いたことで、河道が安定し現在に至る。

出典:佐賀市史第一巻 地理的環境 佐賀平野の水誌 嘉瀬川p67-71 多布施川と小津江 本庄江p81-87 佐賀市の川と橋 深川 保著 佐賀市建設部監理課 嘉瀬川p22 多布施川p22 大覚寺井樋水路p66 縄文の奇跡 東名遺跡 歴史をめぐりかえた縄文のタイムカプセル 佐賀県教育委員会

## 成富兵庫茂安は、400年前に石井樋を構築

1. 「水を走らせず、どうすれば水がゆっくり歩るか」を考へて石井樋を構築し、嘉瀬川の河道が安定して、現在に至る。
2. 多布施川に綺麗な水を必要量取り込み、余分な水は、本流に戻して、下流(低平地)へ流す。

### 石井樋施設群配置図



### 1. 石井樋施設群(水の流れを弱め、洪水を防ぐ施設)

番号	施設名	役割
①	川幅を広げる	川幅を広げて、川の流れを弱めます。
②	荒籠	川の流れの向きを変えたり、弱めたりして堤防を守ります。
③	内堤防	平常時に、川の流れを集めて流量を確保して、取水しやすいようにします。洪水時、内堤防を越えた水は遊水地にあふれさせ、更に野越から平野に流します。
④	竹林	あふれてきた川の水の勢いを弱め、土砂やごみなどが遊水地の畑に流れ込まないようにします。(フィルター役目)
⑤	遊水地(畑)	大雨の時に一時的に水を貯水して、下流の洪水を防ぎます。
⑥	本堤防	遊水地の水を受け止め、遊水地で受け止められなくなったときは、野越を通じてあふれさせて、堤防外の広い範囲で水を受け止め、洪水の被害を抑えます。
⑦	野越	堤防の一部をわざと低くして、洪水時にここから川の水を堤防の外にあふれさせ、堤防を守ります。

## 2. 石井樋施設群(きれいな水を必要量取り込む施設)

番号	施設名	役割
⑧	大井手堰	1.土砂がまざった嘉瀬川の水は象の鼻で流れが川の中央に寄り、大井手堰にぶつかります。そのとき水に含まれた土砂の一部が川底に沈みます。 2.大井手堰にぶつかった水は逆流してゆるやかな流れになり、土砂を少しづつ川底に沈めながら象の鼻と天狗の鼻の方へ流れていきます。 3.象の鼻と天狗の鼻の間を通るうちにさらに流れはゆるやかになり、土砂のないきれいな水を石井樋に導きます。
⑨	象の鼻	
⑩	天狗の鼻	必要な水量を多布施川に流し、余分な水は、二の井手堰を越えて本流へ戻します。
⑪	石井樋	
⑫	二の井手堰	余分な水を本流へ戻します。

参考資料:水の恵みを未来へと 石井樋と佐賀の水 国土交通省九州地方整備局武雄河川事務所

## 3 川上頭首工から多布施川への取水施設

⑬	大井手幹線水路	川上頭首工で取水した農業用水を、多布施川等に送ります。
⑭	多布施川取水口	大井手幹線水路から送られてくる農業用水を多布施川へ流します。



- 多布施川へ2か所からの取水。
1. 嘉瀬川⇒川上頭首工⇒大井手幹線水路(上流部)⇒多布施川 農業用水として
  2. 嘉瀬川⇒石井樋⇒多布施川 河川維持用水(水質維持・生態系保護等に必要水)として
- 参考資料:多布施川の水を考える 佐賀市水対策市民会議資料

## ● 多布施川の流路の概要



多布施川は、嘉瀬川本流の大井手堰から、象の鼻と天狗の鼻の間を流れる嘉瀬川分流の左岸にある石井樋から取水し、自然堤防が残り、名前の由来となった多布施方面へ、植木井樋、城井樋、後毛井樋、御茶屋井樋などで、市内を巡る水路網へ配水しながら神野公園の東側を流れ下ります。

長崎本線の鉄橋を越えた大井手分水工で、天祐寺川(大井手幹線水路)へ分流した後、南東方向に流路を変え、自然堤防が残る栄橋手前で大きく東に流路を変えます。

このあたりから堤防はなくなり、東⇒南⇒東⇒南へと流路を直角に変えながら、多布施井樋、大覚寺井樋、善左衛門井樋、辻の堂井樋、松原井樋などで配水して、北堀取水井樋、西堀取水井樋で北濠と西堀に配水し、北御門から城内に入り、栄城橋から流路を北⇒東⇒北⇒東へと逆流するように変えて東御門から城外に出る。ここから龍谷高校の下を通って、南濠の東側を流れ、筋違橋の所で南濠へつながる水路へ配水した後、東⇒南へと流路を変えながら大崎橋門まで流れ下り、八田江に排水します。(全長約9.5kmの一級河川)

この「多布施川ガイド」は、令和7年度佐賀県KAWARUチャレンジ事業費補助金の交付を受けて、作成しました。

監修:佐賀自然史研究会(桜と蛭を除く生物)  
協力:エスカルゴcc・多布施川ホタルネット  
NPO法人 みなくるSAGA

2026.2.28発行  
編集・発行:山口正吾(多布施川ホタルネット・エスカルゴcc)  
(絵図・鳥瞰図作画:平山章一 写真撮影:山口正吾)  
©2026 山口正吾



## ● 多布施川の水供給と排水システム(井樋・水路網)

成富兵庫茂安は、400年前佐賀城造営にあたり、農閑期に農民と一緒に天井川の嘉瀬川旧河道と東西に延びる微高地を利用して、石井樋で取水した用水を供給する基幹水路として改修し、佐賀城堀の防衛水・飲料水・日常用水・反射炉の用水・周辺地域の農業用水を供給する井樋からつながる約2000kmに及ぶ水路網を整備し、水配分にも配慮した水供給と排水システムを作り上げました。



参考資料:佐賀市の川と橋 深川 保著 佐賀市建設部監理課・佐賀市河川図 多布施川を中心とした水供給システムに関する研究 島谷幸宏 野副文啓・佐賀市アスリート/main/html/rd/p/000000120.000055607.html



## ● 市街地を流れる多布施川の昔と今

- ◆ 飲料水としての重要な水源  
多布施川は、大正13年前までは飲料水として利用され、昭和29年3月からは神野浄水場の水道用水として、今も私たちの生活を支える重要な水源となっています。
- ◆ 疎水百選の多布施川(大井手幹線水路)  
昔も今も、農業用水として重要な水源になっています。疎水百選:平成17年度に農林水産省が日本の美しく豊かな「水・土・里」を育てていくことが重要と考え農業用水をテーマに、「疎水百選」を実施し、国民投票などで選ばれました。
- ◆ 「水清く白砂青松の川」から現在は「桜の川」へ  
市民の憩いの場や水遊び場として、昔も今も利用されています。昔は、屋形船による舟遊びや花見、水遊びなど。今は、カヤックやボートによる川下り、桜の花見、ウォーキングやサイクリング。夏の期間だけ開設される水遊び場など。



◆ 生き物たちが示す清流多布施川の水質(スコア値)  
スコア値とは、水生生物による河川の水質調査法の1つ「スコア法」で使われる水生生物の指標値。1から10の数値で、1が最も汚い水域、10が最もきれいな水域で、多布施川では、下記のような指標生物(平均スコア値7程度)が確認されています。



# 多布施川に架かる主な橋(全体で54か所)とタナジ(棚路)

多布施川には、江戸時代に造られた一番古い「善左衛門橋」や日本土木学会選奨土木遺産の「梅檀橋」(日本最大級の石桁橋)、最近架け替えられた「植木橋」などがあり、一番上流の石井橋から一番下流の新郷橋まで、54所の橋が架かっていて、名称や竣工時期も様々で、橋めぐりするのも面白いと思うよ。  
また、多布施川の川筋には、かつては飲料水などの水くみや洗い物で使用し、人々のコミュニケーションの場となっていたタナジ(棚路)なども残っているよ。



# 多布施川流域の主な史跡と公園



# 多布施川の四季風景



# 多布施川流域で見られる主な淡水魚



# 多布施川流域で見られる主な昆虫



## 多布施川の流域地図

右のQRコードでGoogle Mapのガイド地図が見れます。

**凡例:** 地図内の番号は、パンフレットの写真番号

- 🐛: 蛍観察ポイント
- 🌸: 桜観察ポイント
- 🍁: 紅葉ポイント
- 🌳: 樹木観察ポイント
- 🚲: サイクリングロード

### 多布施川の概要

始まりの石井橋から八田江川への合流点までのおおまかな流路と史跡、主な橋名、トイレ、近くの公共施設、周辺の道路など

# 多布施川流域で見られる主な野鳥



# 多布施川の桜と蛍

佐賀市史下巻p471に「水は川上、さくらは、神野、夏は多布施の舟遊び、フツと見そめた娘の肩に、憎くや蛍が飛んで来る」と歌で紹介されているように、桜と蛍は昔から人々を魅了してきた文化的生物であり、今も多布施川を代表する生き物です。蛍が姿を消した時期もありましたが、最近では佐賀市中心市街地の人工照明が少ない水路では蛍がみられるようになってきています。桜は、大正12年(1923年)に神野公園が鍋島家から市へ移管された頃から堤防美化のため、公園北側の二挺井植(現在の御茶屋井植)付近から大曲(栄橋付近)まで、楓などと一緒に植えられたようです。その後、上流部は、河畔公園整備などで植えられるようになったと思われます。現在、樹齢50年を超える桜の樹勢の衰えが目立ち、枯死する桜が増えてきていて、佐賀市では、桜並木を守るため、桜の苗木の植樹が進められています。また、佐賀市がパークメイト(公園ボランティア)と協力して、遊歩道沿いの桜などの樹木に樹名板を設置する活動がなされています。



# 多布施川流域で見られる主な草花



上記以外の桜の種類と開花時期(早咲きの桜の開花時期は、年によって変動が大きく、2025年は、例年より1か月遅れた種類もありました。)

カンザクラ 1月中旬	カワヅクラ 2月中旬	シナミザクラ 2月下旬	ケイウザクラ 3月上旬	コヒガン 3月上旬	イザクラ(げげ) 3月中旬
オシマザクラ系 3月下旬	オモイガワ 3月下旬	カンザン 4月上旬	イチヨウ 4月上旬	フゲンゾウ 4月上旬	ウコン 4月上旬

★多布施川流域の桜の観察ポイント ● 栄橋⇨神野公園⇨植木橋(ソメイヨシノ) ● 植木橋⇨多布施川河畔公園(ソメイヨシノ等約20種) ● こころざしのもり(ソメイヨシノ等約10種)

# 多布施川流域で見られる主な樹木



### 多布施川のホタル

注)ホタルについては、専門家によるの監視は受けません。

ゲンジボタルとヘイケボタルは、ともに幼虫の期間を水の中で暮らす水生ボタルで、卵、幼虫、蛹、成虫のすべてが光る発光生物です。ホタルは、種類や地域によって光りかたが違います。

●多布施川流域でホタルを確認できた水路

- 多布施川河畔公園水路(ゲンジボタル・ヘイケボタル)
- 五瀬川(ゲンジボタル・ヘイケボタル) ●鳴取川(ゲンジボタル)
- 堂川(ゲンジボタル・ヘイケボタル) ※数匹見かける程度に減少。
- 植木水路(ゲンジボタル) ●若宮水路(ヘイケボタル)
- 多布施水路(ゲンジボタル) ●大覚寺水路(ゲンジボタル)

●ホタル観察のマナー (蛍の成虫は1週間ほどの命、餌はとらずに水だけ飲んで、命を次につぎます。)

- 夜行性のホタルは光の合図でびと早く出会って繁殖するので、ホタルや生息地を懐中電灯などで照らさない。
- ホタルの生息地に入らない。●ホタルを持ち帰らない。●大声で話したりして、住民の方に迷惑を掛けない。